

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 5 月 1 日現在

機関番号：32670

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K17308

研究課題名(和文) 里親養育の広報に関するコミュニティ・リサーチ

研究課題名(英文) Community research about foster care publicity activities

研究代表者

福島 里美 (Fukushima, Satomi)

日本女子大学・人間社会学部・研究員

研究者番号：70532729

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究のテーマは、日本の里親制度の広報活動である。研究1では、筆者が里親会と協働で実施した里親養育の広報活動をコミュニティ支援の実践事例として検討した。研究2では、広報活動の効果を測定するための尺度として「里親養育に対するイメージを測定する尺度」「里親養育に対する態度を測定する尺度」の二つを作成した。研究3では、マーケティングの専門家と協働で、インフォマーシャルの手法を用いたフォトムービーを制作し、広報効果を調べた。その結果、視聴後は、視聴者の里親養育に対するポジティブなイメージや、親近感、協力的態度が高まることが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：The subject of this research is publicity activities for foster care system in Japan. In the 1st study, I analyzed publicity activities regarding the foster care system as a practical example of community support. In the 2nd Study, I created two scales for measuring the effectiveness of publicity activities: "Measuring images for foster care" and "Measuring attitudes toward foster care". In the 3rd study, I made the photo movie in infomercial method with the cooperation of a foster parent with expertise in marketing, and examined the effects of PR. Results showed that the viewers had a more positive perception, greater sense of familiarity, and improved, cooperative attitudes regarding foster care after watching the video.

研究分野：臨床心理学

キーワード：里親養育の広報 里親養育のイメージ 里親への協力的態度 エンパワメント

## 1. 研究開始当初の背景

### (1) 里親養育支援の課題

2000年の児童虐待防止法制定以降、被虐待児など親元で生活できない児童が激増し、そうした児童の養育の場として里親が期待されてきた。そして児童虐待防止法制定や里親制度改正に伴い、里親委託児童数が2倍以上増えてきた。こうした里親委託推進の法整備に伴い、里親養育支援を充実させようとする動きも出始め、里親支援現場に雇用される心理職も増えてきた。しかし日本では心理学領域における里親研究は少なく、心理学を学ぶ学生が里親について知る機会も限られている。したがって、里親養育に理解ある心理職の養成は早急に取り組むべき課題である。

また専門職のみならず、里親養育をとりまく地域住民に里親養育を正しく理解してもらうことも大きな課題である。里子たちの行動の特徴は、里親や児童福祉関係者、研究者の間では理解されるようになってきたが、一般にはあまり知られていない。里親養育には周囲の理解と協力が不可欠であるものの、里親子が周囲の理解と協力を得て対応するためには、里親が積極的に働きかけなければならない現状がある

### (2) 里親が知られていないことへの取り組み

筆者は、「里親養育が一般に知られていない」という課題に取り組むため、里親養育の広報活動を重視するA市里親会と協働で、里親養育の広報活動「里親さんを招いてのシンポジウム」を実施した。ここでは、心理学を学ぶ女子大学生を対象に2名の里親が養育体験を話し、そこに臨床心理士が心理学的視点から解説を加える構成とした。そして、受講前後の受講生の里親に対するイメージを調査し、里親に対するイメージ得点に変化した(福島里美・福島円・鶴養, 2013)。このシンポジウムは、研究者が里親のニーズに基づいた企画を設け、里親会との協働作業で広報を行うという点で、従来の心理学的研究にはない取り組みとなった。コミュニティ心理学では、研究者と当事者との連携を“研究者とコミュニティ・メンバーとの協働関係”(箕口, 2007)と呼ぶ。筆者と里親会との関係作りについて、コミュニティ心理学会で議論した結果(福島・鶴養・高橋他3名, 2013)、対象者との関係作りに臨床心理学的視点からの細やかさが加わった点が、コミュニティ心理学領域においても新しいアプローチであるとの指摘を受けた。

## 2. 研究の目的

筆者のこれまでの取り組みについて、統計的な調査結果をポスター発表した(福島里美・福島円・鶴養, 2013)、里親会との関係形成については自主シンポジウムで議論したのみである(福島・鶴養・高橋他3名, 2013)。里親養育に関する心理学的知見を幅広く共有する必要性を考えると、これまでの経過を

論文として公表する必要がある。そこで、本研究では、里親養育の広報活動に関する取組みを心理学的視点から整理することを第1の目的とする。

福島里美・福島円・鶴養(2013)で使用した質問紙は、削除項目が多く、尺度の信頼性の低さが課題となった。またシンポジウムを受講した受講生の自由記述欄には、里親に対するイメージの変化を述べる記述が多かったものの、それを量的データに十分反映されていないという課題が残された。そこで、里親に対するイメージをよりの確に捉えられるよう尺度を改良し、再度広報活動を実施し、その効果を調べることを第2の目的とする。

## 3. 研究の方法

### <研究1> 里親養育の広報活動に関する実践事例研究

研究1では、里親養育の広報活動を実践するための里親との連携や広報の手順を明らかにし、コミュニティ支援の実践事例として検討した。大学の講義科目で里親養育の広報活動を実施するまでの手続きを、ニーズ・アセスメントに基づく広報実施手順をコミュニティ支援の実践事例として検討した。

### <研究2> 里親養育に対するイメージと態度を測定する尺度の作成

研究2では、福島ら(2013)の質問項目を修正し、里親養育に対するイメージと態度を測定する尺度の修正版を作成した。そして2つの尺度の相関から、里親養育に対するイメージと態度の関連も調べた。

福島ら(2013)の尺度に新たな項目を加え、里親に対するイメージを測定する17項目と、里親養育に対する態度を測定する19項目を設定した。里親のイメージを測定する尺度は、SD法で「身近な-疎遠な」のように対になる語を提示し、「非常に-やや-どちらともいえない-やや-非常に」の5件法で回答する。里親に対する態度尺度は、「非常にあてはまる-全くあてはまらない」の5件法とした。その他、里親制度を知っているかを「詳しく知っている-知らない」までの4件法でたずねた。回答者は、20代~60代の男女、計422名である。

### <研究3> フォトムービーを用いた広報効果の研究

研究1では、司会者の力量により広報効果が左右される可能性のあることが課題となった。また、里親であることを周囲に知らせない里親の多い地域では、大勢の前で体験談を発表する里親の募集自体が困難であった。そこで研究3では、こうした地域特性や司会者の力量に左右されず、幅広い地域で里親養育の広報活動を実施する方法を検討した。

そして、マーケティングの専門家との協力のもと、里親養育の広報を目指したフォトムービーを制作し、その広報効果を調べた。フォ

トムービーは、目標設定、ターゲティング、方法選択、ストーリー設定、編集という手順で制作した。目標設定では、研究1と2の課題を踏まえ、里親養育をイメージできる視覚的刺激、共感を生むメッセージ、ネガティブなイメージの払拭、壮絶で色濃い体験談との差別化、支援行動のトリガになることの5つを設定した。そして里親をよく知らない視聴者をターゲットに、里親子の出会いから家族形成までの映像に、親から子へのメッセージを加え、12分のフォトムービーにまとめた。

そして心理学を学ぶ10~40代の大学生・大学院生119名(男性37名、女性78名、性別不明4名)に協力を依頼し、フォトムービー視聴前後の里親養育へのイメージと態度を測定した。さらに自由記述で感想をたずねた。

#### 4. 研究成果

<研究1> 里親養育の広報活動に関する実践事例研究の成果

(1) ニーズ・アセスメントに基づく広報実施の手順

本研究では、里親養育の広報活動を実施するまでの手順をA市の里親委託状況と里親会活動の特徴を整理、A市里親会のニーズを把握、出前講座の聴講と本事例の枠組み作り、広報を実践する場の設定、里親会への依頼の5段階のプロセスから検討した。

コミュニティの特性を把握し、ニーズの背景にある社会的文脈を明らかにした上でプログラムを計画・実施するプロセスを、コミュニティ支援ではニーズ・アセスメント(Altschuld& Witkin, 2000)と呼ぶ。本事例は準備段階で、A市里親会の特徴やニーズを整理し、広報活動の場にA市里親の求めるカウンセリング機能やコンサルティング機能を加えられるよう、コンサルタント経験豊富な教授に司会を依頼し、里親会のニーズに対応できる広報の場を設定した。

広報活動中の筆者と司会者、体験を話す里親とのやりとりを、出会いの段階、養育における驚きや戸惑いを共有する段階、失敗談を通じた不完全な里親の開示、失敗や困難とどう向き合い、どう乗り越えているか、養育を通じて得たものを振り返る段階の5つのプロセスから事例検討の手法によって分析した。

このプロセスは、A市里親会の「里親を知ってほしい」「里親の立場に立って話を聞いてほしい」「専門的なアドバイスがほしい」といったニーズに応えられるよう、司会者は里親の養育体験を肯定し、心理学的側面から意味づけ、さらに受講者が里親を身近に感じられるよう、解説やコメントを加えた。

筆者と司会者が、事前にコミュニティ支援の考え方を共有しながら、里親会のエンパワメントとなりうる広報活動を目指し、当日もニーズに即したエンパワメントを実践した

ことが、広報の成果にも効果的に作用した。シンポジウムのプロセスをコミュニティ支援の視点からみると、シンポジウムでは、司会者が里親の体験を肯定的に受け止めるカウンセラー役割を果たしながら、未解決の課題には解決の方向性を示すコンサルタント役割を担い、A市の里親支援に欠けていた機能を積極的に補った。さらに司会者は、心理的エンパワメント(Rappaport, 1984)を意図し、里親に受講者の見習うべき相手という役割を付与しつつ、体験談に対して里親の自信と統制感が高まるような肯定的解釈を加えた。このプロセスは、第四段階のコーピング・クエスチョン(養育上の困ったことを乗り越えた秘訣をたずねる)を介した対話によってさらに深まり、里親の養育実践者としてのリソースが引き出されることとなった。打ち合わせでは緊張感・警戒感を示した里親が、受講者の前で自らの失敗も話すことができたのは、司会者の積極的介入によるものだといえる。そして、失敗も含めた里親の人柄や思いを共有できたことは、受講者には身近な大人としての里親を感じさせ、里親に対する親近感につながり、広報の成果につながった。

シンポジウムの最終段階では、里親と司会者が里親養育を「楽な感じ」「色んなものをもらった」「お互いが豊かになる」「こっちが育てられる」と振り返った。これは、「養育の大変さ」や「里親の負担と困難」(宮島, 2013)といった従来の里親養育のイメージとは異なる意味づけであった。このような従来の見方や枠組みに変化を起こす意味づけを家族療法ではリフレーミングと呼び、一定の判断や価値観で知覚される事実について、事実を変えることなく意味づけや価値判断を変えたいときに適用する(平木, 1996)。本事例の場合、意図的なリフレーミングではないものの、里親養育を知ってほしいという目標のもとで、特別な人ではない里親の日常を伝え、従来のイメージとは異なる里親養育の意味づけをしたことは、受講者の里親養育に対する認識を変える効果をもたらしたと考えられる。受講後に受講者の里親養育に対する協力的態度が高まったのも、リフレーミングの成果と思われる。

里親会へのフィードバック資料作成では、A市里親会への組織レベルのエンパワメントをねらい、里親会へ伝わる点を重視して作成し、「受講した人が里親にならなくても、里親の理解者になってほしい」という里親会の目的に沿った成果が得られたことを図表を用いて提示した。里親会会長から「こんなにきちんと結果を返されたのは初めてで嬉しい」との返事があり、里親会の広報活動を支持し、今回の広報の成果を共有しようとする筆者の姿勢が里親会側に伝わったことを示すものといえる。

(2) 里親養育支援における心理職の可能性  
本事例は、心理職が里親養育を取り巻くコ

コミュニティで役割を果たす方法として、ニーズ・アセスメントや協働関係、コンサルタントやエンパワメントといったコミュニティ支援の姿勢が有効であることを示した。これは里親を非専門家とし、福祉の専門家が自らの判断をもとにケースワークを行ってきた従来の里親支援のあり方を問い直すものであり、今後の里親支援において、里親の視点やニーズに基づいて、支援者が養育に関わる姿勢が必要だということを示した。

### (3) 研究1の課題

研究1は、ニーズ・アセスメントに基づくコミュニティ支援の成果を示したが、シンポジウムのプロセスは、司会者の経験や力量に支えられた部分が多い。効果的なコミュニティ支援を実践するには、コミュニティ支援に関する知識の習得も大事だが、コミュニティ・メンバーの信頼を得て、有意義なプログラムを遂行するだけの力量が求められることも本事例は示した。また、本研究の方法での広報活動は、体験談を話せる里親の存在や里親に理解ある司会者の存在も必要となり、広い地域で行うには難しいという課題が残された。

### <研究2> 里親養育に対するイメージと態度を測定する尺度の作成の成果

研究2では、里親養育に対するイメージと態度を測定する尺度の作成を目指し、福島ら(2013)の尺度を修正した項目について、20代~60代の男女、計422名から回答を得た。尺度の検討は、IBM SPSS Statistics 24を使用した。項目分析の結果、いずれの項目も正規分布を示し、天井効果やフロア効果はみられなかった。

#### (1) 里親に対するイメージ尺度の検討

里親に対するイメージ尺度では、ポジティブなイメージに得点が高まるよう逆転項目を修正し、主因子法 *varimax* 回転による探索的因子分析を行い、因子負荷量が.40に満たない3項目を削除した。残りの14項目を因子分析し、固有値1以上因子負荷量.40以上で3因子抽出した(表1)。

第1因子は「嬉しい-悲しい」等の6項目からなり、快活陰鬱因子と名付けた。第2因子は「身近な-疎遠な」等の5項目からなり、親近疎遠因子と名付けた。第3因子は「大変な-平穏な」等の3項目からなり、日常非日常因子と名付けた。各因子の *cronbach* の  $\alpha$  係数は.78~.85と高く、内的整合性が確認できた。

#### (2) 里親養育に対する態度尺度の検討

里親養育に対する態度尺度を主因子法 *varimax* 回転にて因子分析し、固有値1以上因子負荷量.40以上で3因子抽出された(表2)。複数の因子に.40以上の負荷量を示した2項目を削除し、17項目を因子分析し、3因子抽出された。第1因子は協力因子、第2因子

子は敬遠因子、第3因子は親しみ因子と名付けた。各因子の  $\alpha$  係数は.83~.91と高く、内的整合性を確認した。次に妥当性を調べるため、里親制度を詳しく知っている、知っている、聞いたことがある、知らない、の4グループの得点を分散分析で比較した。その結果、親近疎遠因子と協力因子、親しみ因子に有意差がみられた。

表1 里親養育のイメージを測定する尺度の因子分析結果

	第1因子 第2因子 第3因子 共通性			
	第1因子	第2因子	第3因子	共通性
第1因子: 快活陰鬱因子 ( $\alpha = .85$ )				
嬉しい	.795	.114	.010	.645
元気な	.775	.255	-.097	.676
活発な	.707	.075	-.084	.512
開放的な	.682	.252	.071	.397
楽しい	.566	.275	.021	.533
楽しい	.530	.234	-.098	.346
第2因子: 親近疎遠因子 ( $\alpha = .82$ )				
なじみのある	.185	.783	-.030	.649
身近な	.180	.669	-.092	.489
親しみのある	.332	.631	-.114	.522
近い	.090	.613	-.112	.396
一般的な	.286	.592	-.024	.432
第3因子: 日常非日常因子 ( $\alpha = .780$ )				
大変な	.017	.011	.905	.820
自分とは無縁の	-.027	-.111	.600	.374
困難な	-.080	-.128	.731	.557
*逆転項目				
寄与率 (%)	21.954	17.801	12.725	

表2 里親養育に対する態度を測定する尺度

	第1因子 第2因子 第3因子 共通性			
	第1因子	第2因子	第3因子	共通性
第1因子: 協力因子 ( $\alpha = .917$ )				
助けを要する里親子・養親子がいたら、協力したい	.910	-.153	.052	.854
里親養育で自分に協力できることがあればみたい	.907	-.097	.118	.846
自分の周りに助けを要する子どもがいたら、力になりたい	.834	-.125	-.010	.712
近くに里親子・養親子がいたら、協力したい	.725	-.100	.076	.541
児童福祉のボランティアに興味がある	.678	-.127	.344	.594
適任者がいれば、里親養育を勧めたい	.660	-.054	.230	.491
児童福祉の仕事に興味がある	.608	-.133	.387	.538
第2因子: 敬遠因子 ( $\alpha = .832$ )				
里親制度とは疎遠である	-.012	.772	-.252	.659
里親制度は未知の制度である	-.016	.674	-.169	.483
里親制度にはなじみがない	.048	.662	-.275	.516
里親制度とは無縁である	-.052	.651	-.363	.558
里親養育は特別な人がするものだと思う	-.227	.582	-.121	.405
里親家庭は近寄りたいたい印象がある	-.190	.532	-.030	.320
里親養育で、自分が協力できることはないと思う	-.295	.486	.039	.325
第3因子: 親しみ因子 ( $\alpha = .903$ )				
里親家庭に親しみがある	.250	-.258	.754	.698
里親養育を身近に感じる	.225	-.259	.836	.817
里親制度になじみがある	.129	-.261	.794	.714
寄与率 (%)	26.16	18.043	15.048	

### (3) 二つの尺度の関連

里親に対するイメージ尺度と里親養育に対する態度尺度の因子間の関連を調べるため、相関係数を算出した(表3)。その結果、里親に対するイメージ尺度と態度尺度との関連では、快活陰鬱因子が、里親養育への協力因子( $r = .484^{**}$ )、親しみ因子( $r = .435^{**}$ )にいずれも有意な正の相関を示し、敬遠因子には負の相関( $r = -.311^{**}$ )を示した。親近疎遠因子もまた、協力因子( $r = .273^{**}$ )と親しみ因子( $r = .727^{**}$ )との間に有意な正の相関を示し、敬遠因子( $r = -.477^{**}$ )とは負の相関を示した。日常非日常因子は、敬遠因子と有意な正の相関を示し( $r = .306^{**}$ )、協力因子( $r = -.292^{**}$ )と親しみ因子( $r = -.101^{*}$ )との間に負の相関がみられた。

表3 下位尺度間の相関係数

	里親に対するイメージ尺度		里親養育に対する態度尺度				
	快活陰鬱	親近疎遠	日常非日常	協力	敬遠	親しみ	
里親に対するイメージ尺度	快活陰鬱	1	.484**	-.082	.369**	-.311**	.435**
	親近疎遠		1	-.175**	.273**	-.477**	.727**
	日常非日常			1	-.292**	.306**	-.101*
里親養育に対する態度尺度	協力			1	-.310**	.411**	
	敬遠				1	-.470**	
親しみ						1	

\* $p < .05$  \*\* $p < .01$



#### (4) 尺度作成に関する考察

本研究で作成した質問紙は、いずれも信頼性を確認でき、妥当性については検討の余地があるものの、尺度作成の目的は概ね達成できた。里親養育に対するイメージと態度の関連では、態度の敬遠因子と他の下位尺度との関連から、里親養育を敬遠する態度は、快活で身近なイメージをもつほど弱まる可能性があると考えられる。また、日常非日常因子では、「大変、困難」の項目と「自分とは無縁」の項目が強い関連があり、この因子は、里親養育を敬遠する態度因子とも強い関連を持った。よって里親養育の難しさの強調は、里親が敬遠され、協力者を得にくくする可能性をもつことが示唆された。

この結果から、里親養育の普及啓発では、里親養育が日常生活の延長線にある点や、快活で親しみもてるイメージを示すことが、里親養育を身近に感じさせ、里親養育への理解や協力を促すことにつながるといえる。

#### < 研究3 > フォトムービーを用いた広報効果の研究の成果

研究3では、前述の手順で作成したフォトムービーを流し、視聴前と視聴後に里親養育に対するイメージと態度を測定し、その差を比較した。研究2で作成した質問項目を用い、項目分析では対象者の視聴前後の回答を合算して因子分析を行った。その結果、里親養育に対するイメージ尺度( $\alpha = .931$ )は、快活・陰鬱イメージと親近疎遠イメージの2因子からなり、里親養育に対する態度尺度( $\alpha = .881$ )は敬遠因子、協力的態度因子、親近感因子、児童福祉への関心因子の4因子から構成された。

#### (1) 里親養育に対するイメージの変化

里親養育に対するイメージ尺度のフォトムービー視聴前後の下位尺度得点を  $t$  検定により比較した(図1)。その結果、視聴前より視聴後の方が快活な方向へ得点が高く( $t=14.11, df=103, p<.001$ )、親近-疎遠イメージも視聴後の方が親近の方へ得点が高かった( $t=16.16, df=106, p<.001$ )。

この結果は、フォトムービーの視聴が、視聴者の里親に対するイメージを快活で親近感のある方向へ変化させたことを示す。

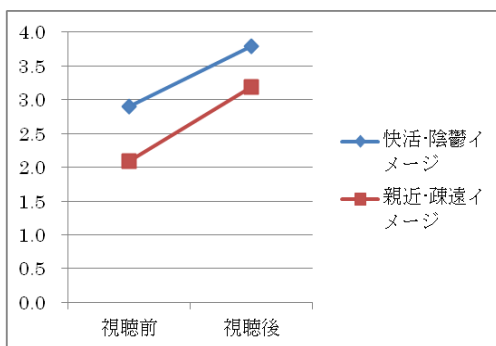


図1 視聴前後の里親養育のイメージ

#### (2) 里親養育に対する態度の変化

里親養育に対する態度尺度では、敬遠因子(得点が高いほど敬遠)は視聴後の得点が低く( $t=10.36, df=103, p<.001$ )、協力的態度因子( $t=3.98, df=105, p<.001$ )、親近感因子( $t=14.38, df=107, p<.001$ )、児童福祉への興味( $t=3.97, df=107, p<.001$ )の3因子は、いずれも視聴後の得点が有意に高かった(図2)。したがって、フォトムービーの視聴が、里親に対する協力的態度や親近感、児童福祉への興味といった里親養育に対する態度を高める効果を示したといえる。

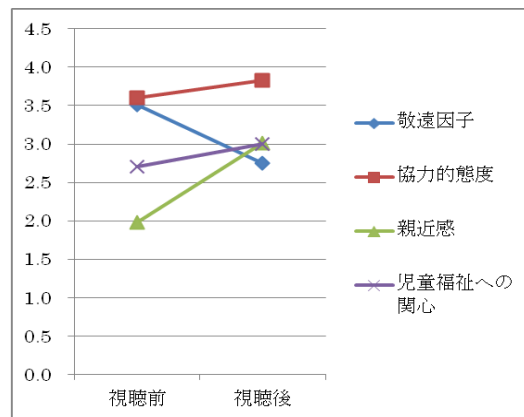


図2 視聴前後の里親養育に対する態度

#### (3) 自由記述の分析

視聴後の感想から頻出語を抽出し、共起ネットワーク図を作成した(図3)。その結果、視覚的に里親の日常を感じ、イメージが変わり、身近に感じたことを示す結果が得られた。

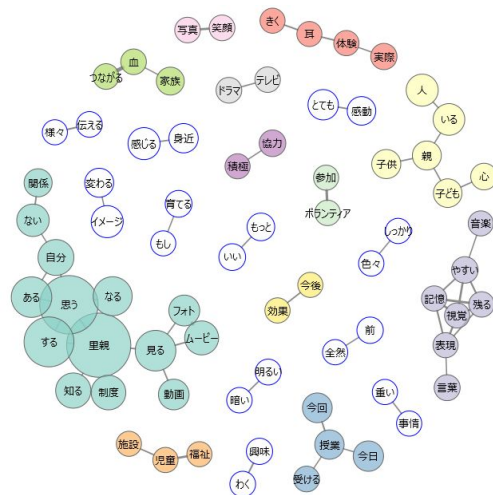


図3 視聴後の感想から作成した共起ネットワーク図

#### (4) 広報効果に関する考察

今回の調査から、インフォマーシャルの手法に基づくフォトムービーは、里親養育に対するイメージや態度を変化させる効果をもつことが示された。こうした効果は、日常の親子の映像により、里親養育を具体的にイメージし、身近に感じられるようにしたことや、

親から子へのメッセージにより、共感しやすくなったためと考えられる。

今後は、長期的な効果や、実際の行動の変化の検討、将来支援者となるための教育が課題である。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

福島里美、里親から養育のコツを聴く - ほめ方・叱り方、試し行動への対応について -、2016、ソーシャルワーク実践研究第、4、pp.78-88、査読有

福島里美、里親による養育体験談が受講者の里親に対するイメージに及ぼす影響について、2016、心理相談室紀要、14、pp.39-47、査読無

福島里美、里親養育の広報活動に関する実践事例研究 - 臨床心理学の授業で女子大学生に里親養育体験を伝える試み -、2016、コミュニティ心理学研究、19(2)、pp.196-212、査読有

〔学会発表〕(計3件)

Fukushima, S.、Foster care in Japan: Effects of using a photo movie on public relations、2018、29'International Congress of Applied Psychology、Printed poster presentation、査読有

福島里美、里親養育の活用を阻む里親イメージとは何か - 里親養育に対するイメージと態度の関連から -、2018、日本子ども家庭福祉学会第19回大会、口頭発表、査読有

里親養育における「試し行動」とは何か、2016、日本心理臨床学会第35回大会、口頭発表、p129

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

取得状況(計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年月日:

国内外の別:

〔その他〕(1件)

ホームページ等

福島里美、里親養育の課題とニーズに合わせたコミュニティ・リサーチ - 地域に根差した里親養育支援を目指して -、2016、博士論文(日本女子大学心理学博士)

#### 6. 研究組織

(1)研究代表者

福島里美 (FUKUSHIMA Satomi)

日本女子大学・人間社会学部・学術研究員

研究者番号: 70532729